

■**円中孫平** **明治維新期に、“日本生糸の米国輸出”の扉を開き、日本の美“九谷焼”を救った石川県の近代産業の先駆者。**

まるなかまごへい

富籤流行・・1830＝ 越中国東砺波郡和泉村で、農家石崎八郎兵衛の三男に生まれる。

大塩平八郎乱1837＝ 7歳：

蚕社の獄・・1839＝ 9歳：

阿部正弘首座1845＝15歳：

・・・・・1848＝**18歳：**

尊徳報徳論・1851＝21歳：_金沢の笠市町で菅笠商として大繁盛し加賀藩から“円中”の屋号を名乗ることが許されていた{中野屋孫兵衛}の養子になると，“円中”を自らの姓に据え、伝統的な家業を継承しつつも、その枠に収まらない近代的な商社へと脱皮させるべく動き出し、

ペリー来航・1853＝23歳：

蕃書調所・・1857＝**27歳：**

商都大阪へと身を投じ、商売の真髓が渦巻くその地で、後に“商才の塊”と称される基礎を徹底的に叩き込まれ、海を越え世界を相手に立ち回る“貿易”の揺るぎない土台になり、

桜田門外変・1860＝30歳：

薩長同盟・・1866＝**36歳：**

大政奉還・・1867＝37歳：

***江沼・能美郡で生産された茶を神戸港から輸出するルートをいち早く構築、この先見明快な行動こそが、“輸出の先駆者”へと押し上げる端緒になるのである。**

明治維新・・1868＝38歳：

_北越戦争が勃発すると、混乱を極める戦時下、新政府軍からの要請に応じ、兵士の被服3万3千着という膨大な物資を一手に引き受け、滞りなく納入してその名を決定的に高め、新政府軍から絶大な信用を得、その後の世界的な飛躍を支える最強の武器となるのである。

初の日刊新聞1870＝40歳：

自ら上海へ雑貨と昆布を輸出し利益を上げたこともあるが、生糸、茶、織物など原料の交易は資本力さえあれば誰にでも出来るという考えから、_普通の商人では出来ないことを模索、

廃藩置県・・1871＝41歳：

七尾軍艦所の施設払い下げを受け、造船技術の普及と人材育成に尽力したりするほどで、

明治6年政変 1873＝43歳：

_金沢に農商務省の巡回技術指導として来た納富介次郎と出会う。’富国の道は貿易にあり’と考えていただけでなく、美術工芸にも造詣が深く、また、お抱え教師として来日していたドイツ人のワグネルの影響もあって、富国の道を“美術工業(工芸)品”を貿易する事を目指し、職人へのデザインの提供や学校の創設にも関わる納富の影響を強く受け、明治政府が国威発揚を掲げ、東洋文化を西洋に誇示する万国博覧会を、単なる展示の場ではなく、金沢銅器や九谷焼など石川の物産を世界市場へと叩き込む“勝負の場”と捉え、日本政府として初めて公式参加する_ウィーン万国博覧会に、リオンで製糸法を学ぶべく派遣された婿養子の円中文助や製陶法を学ぶ京都の丹山陸郎も加わっていたと言う(一説には、金沢を代表し、後に石川県の産業技術指導から工業学校を開校し校長になる納富介次郎と共に、ウィーン万博のため渡欧し、欧州市場の熱気と需要を直接肌で感じ取ったと伝えられる)。

佐賀の乱・・1874＝44歳：

販路を失いかけていた九谷焼の年産額は、この年、わずかに3万円程度に過ぎなかったが、世界へと販路をこじ開け続けて行き、

初の民間工場1875＝**45歳：**

三つの反乱・1876＝46歳：

貿易以外でも、明治政府により藩政期から金沢で作られている漢方薬の紫雪、烏犀円、万病円の製造が不許可となるなど受難の時代を向かえるが、尽力によって、薬10種が許可になったと言われる。***この年のフィラデルフィア万博には、自らアメリカへと渡り、石川の誇る銅器や陶器、さらには製糸や製茶を堂々と出品、そのすべにおいて一等賞を獲得するという驚異的な快挙を成し遂げ、日本工芸の質の高さを世界に証明してみせた。さらに、ニューヨークのローム商会と直接交渉を行い、大量の生糸注文を取り付けることに成功、“日本生糸の米国輸出”という歴史的な第一歩となり、後の外貨獲得の柱となる貿易の礎を築いた。野心は、その後もとどまることを知らず、’いい物を外国で売るのは日本のため!’という信念から、当時の総理大臣や外務大臣と金銭的援助を含めて直接交渉したと伝えられる。**

西南戦争・・1877＝47歳：

_石川の屋台骨となる繊維産業の振興には特に心血を注ぎ、養子文助を自費でイタリア・チューリンへ派遣して本場の最新の撚糸技術を学ばせ、長谷川準らと共に{金沢撚糸会社}を設立して石川繊維業の近代化を主導、最新技術を地元の工場に導入することで、石川の繊維業を世界基準へと引き上げる強固な土台を築き上げたのである。こうした献身的な活動は国家からも高く評価され、

大久保暗殺・1878＝48歳：

_明治天皇が北陸を巡幸した際、金沢博物館において孫平が出品した海外貿易品や精巧な銅器が天覧に供されるという、商人として最高の名誉に浴し、円中孫平の名は石川を代表する実業家として頂点に達したのである。横浜に{円中組}を設立、パリ万博には養子の文助らを派遣して銅器で金牌を、陶器で銀牌を獲得させ、“ジャポニスム”の生みの親と言われた林忠正の努力もあって、日本工芸の地位を不動のものにし、“円中組製の九谷焼”は細密で金色を多く用いた豪華な物で欧米では”ジャパンクタニ”と持てはやされ、その圧倒的な市場開拓力によって、九谷焼の職人たちから“大恩人”と崇められることになるのである。

・・・・・1880＝50歳：

_{扶桑商会}を設立、パリには支店を置き、シカゴには代理店を構えるなど、当時としては破格のスケールで世界規模の流通網を独力で築き上げた。一地方の商人が、国家の保護に頼り切ることなく、パリやシカゴを拠点に世界を股にかけて立ち回る姿は、まさに近代貿易の先駆者そのもので、

明治14年政変1881＝51歳：

20万円へと急増した。彼は伝統をただ守るのではなく、海外への輸出産業という新たな命を吹き込むことで、九谷焼や加賀象嵌といった地場産業地方の工芸を“世界ブランド”へと変貌させたのである。衰退の危機にあった伝統工芸を、輸出産業の柱へと成長させた功績は計り知れない。単に海外で私腹を肥やすことにはなかった。_貿易で得た莫大な利益と最先端の知見を、惜しみなく郷土・石川の近代化へと投じてきたが、

秩父事件・・1884＝**54歳：**

林忠正の起立工商会社パリ支店の負債、在庫ともども{円中組}に移管され、不良在庫も含まれて目算が違い、ヨーロッパの嗜好の変化やオランダおよびニース博覧会の失敗、フランスの不況や為替相場の急変、さらに丹山陸郎の起こした詐欺まがいの事態から銀行融資にも影響していたところに、_日本経済を襲った松方デフレによる大恐慌が運命を一変させる。激しい為替相場の変動は、海外に築いてきた広大なネットワークにとって致命的な打撃となり、誇り高さ{円中組}や{扶桑商会}の閉鎖を決断し、失意のうちに拠点としていた地を去り、金沢へと帰郷する。世界を股にかけて立ち回った豪商のあまりに急な落日であった。

国民之友始・1887＝57歳：

本康宏史著「美術工業と輸出商」の九谷焼輸出関連年表によれば、貿易九谷の最盛期を迎え、日本の陶磁器貿易の第一位となり、全九谷生産額の80%が貿易で占め、円中孫平に続く九谷貿易に携わる商人が多数記載されている。自身の出自である菅笠商たちを束ねる{菅清会社}の設立や、森下森八、中屋彦十郎らと共に、_現在の金沢商工会議所の前身となる組織金沢商工会の結成に奔走するなどしつつも、

帝国憲法発布1889＝59歳：

郡司千島探検1893＝**63歳：**

日清戦争始・1894＝64歳：

かつての華やかな成功からは想像もつかないほど、晩年は静かなものだった。金沢の片町に居を構え、かつての栄光を誇ることもなく、漁網の製造販売などを細々と営みながら、金沢の片町郵便局長なども務め、_静かに余生を過ごし、

教科書疑獄・1902＝**72歳：**

日露戦争終・1905＝75歳：

韓国併合・・1910＝80歳：

_没した。

ホームページ「YUTA KONISHI」、インターネットブログ「“ジャパンクタニ”と円中孫平」、